

草創期の京都の蘭学について

山 本 四 郎

【要約】 京都における蘭学の発達については、蘭医学における小石元俊と蘭学の辻蘭室とが注目される。本稿では元俊の出現の基盤をなした京都の学界、とくに医学の状態から、元俊の地位を定め、さらに江戸の蘭学との交渉を通じて元俊の発展を述べ、つかかる環境から蘭室の蘭学専攻に及び、さらに彼らによつて京都の蘭学が発展して次の興隆期を準備したこと、および古医方に浸透して漢蘭折衷派におよんだこと、ならびに漢蘭折衷派の内容を検討した。史料の不充分と、医学に関する無智から十分を期しえなかつたことを遺憾とする。

は し が き

すべて一文化事象の発生・発展には、それが創生であれ移植であれ、一つの必然性があることは述べるまでもない。また日本における蘭学の発達が、国内的要因としては封建的支配の弛緩・儒学における溯源的学風、国際的には西欧における新興科学の影響——鎖国下に不充分ではあるが——に起因すること、また周知の事実である。京都の蘭

学の場合も事情は多分に類似している。本稿においては小石元俊による江戸蘭学の移植とその発展を、文化期以前、すなわち十八世紀後半を主としてとり上げることとした。

筆者は京都の蘭学の通史を叙述することにかんがりの関心をもつてゐる。これは、京都の蘭学が日本の蘭学史上に少なからぬ重要性をもつており、部分的には先学の立派な業績があるが、まだまとまつた論者が無いのと、部分的には従来の研究に安座した嫌いがなくもないと思うからであ

る。しかし本稿は通史ではないので、編年の事実はなるべく註の形で残すこととした。

京都における蘭学の發展は、大きくみて三期に分つことが出来る。第一期は小石元俊の蘭医学の移植から、これが儒医や漢蘭折衷派に伝播し發展してゆく過程である。第二期は海上隨鷗の京都移住から海上一門の發展、元俊の子元瑞、新宮涼庭の活躍によつて、京都の蘭学がさかんに發展する興隆期ともいふべき時期で、文化より天保中・末期にいたる。この期の終りは興隆期の人々の晩年または死歿を以て画期づけられる。これ以後は日野鼎哉らの種痘術と広瀬元恭の活躍が目立つのみで、さほど目新しい發展は見られない。つまり第三期は全般的にみて衰退期といえる。第二期以下については、いづれ近く発表したいと思つている。(個別研究として「新宮涼庭の研究」は完成している)ここでは第一期のみを叙述の対象とし、はじめに元俊が蘭医学に転じてゆく背景を、次に元俊の發展と辻蘭室(資料が不十分であるのでごく簡単に)について、最後に儒医および漢蘭折衷派への影響と第二期への準備期の様相とに区分して述べる。

一

日本の蘭学が漢学の実証的傾向によつて導かれたことは、「蘭学事始」の有名な玄白の回想を引用して屢々説かれるところである。京都の場合もまたほぼその軌を一にする。

この關係についてはすでに新村出博士によつてほぼ尽されてゐるので、付表の「学統關係図」によつてその概要を示すにとどめる。(ただし必要と思われる範圍で一部補足した)ただ二三注意すべき点を指摘すれば、東涯が父仁齋に比して経験的研究に関心をよせたこと、慈雲が東涯にわかより師事しなかつたが、思想的にも參禅二十年の弟子元俊にかんりの影響を与えたいこと(この点については末中哲夫氏が近く発表されることと思う)である。なお江戸と対比すれば、江戸においては封建的支配の弛緩が学問の自由研究をある程度促し、オランダ流行の氣運をもたらした、蘭学の基盤を作つたのに対し、京都では従来禁止されていた人体の觀臟ないし解剖が部分的に官許を得、(江戸でも小塚カ原の觀臟以前に若干の解屍が行われたことは玄白の「形影夜話」に記されているが、その成果については

解剖知見表

年月日	西暦	解剖・顕微鏡者 (図書)	場所	創見	欠陥	概評
宝暦4 2.7 (閏)	1754	山脇東洋 「蔵志」	京都	気道を前、食道を後とす。脾に皺紋を認む。肝右四葉、左三葉、腸壘積十六曲とす	心臓を正中に描く。胃のかき方が逆。大小腸の区別なし。膀胱を腸に連り、腎を精液の生ずる所とす	粗笨で、先入観(五臓六腑説)に捉われる
8 3.26	58	栗山孝庵	萩			臓志肯定
" 5.27	"	伊良子光頭 「外科訓蒙図彙」	伏見	大小腸の区別をみる	尿を小腸より出るとす	カスバル流
9 6.21	59	栗山孝庵	萩	脾臓を見る(但し濃血が腸胃の外で凝固したと考えた)	神経と脛を混同す	女屍解剖・医者執刀の始め
明和2 —	65	平壺賀甲叔 「腑分の図」	一	図に大小腸の区別あり。盲腸を認めた	盲腸を腸から膀胱への尿の通路とす。	蔵志に刺戟さる
6 11.19	69	半井彦 山室知将	福井	輸尿管を始めて認めた?	心臓を正中とす。大小腸の区別なし。輸尿管を精道の兩穴(陰茎海绵体をかく考う)に通ずとす。	上記より劣る
7 4.25	70	河口信任ら 「解屍編」	京都	腎が耳に通じ、肝が竅を開くという古説を斥ける。肺葉の個体的差異を認む。心臓に包絡を認め、膈膜上で左に斜によるとす、大小腸の区別あり	気管が下心竅に属し、大動脈が気管に合し、膀胱を大小腸の境界の所につくとした。腎が泌尿器なるを知らず。肋骨が背柱に連なる状態が不自然	
8 3.4	71	杉田玄白ら 「解体新書」	江戸	神経解剖学の紹介等画期的		
" 12.25	"	山脇東門 「玉砕臓図」	京都	大脳皮質・小脳皮質を髓質から区別、眼の硝子体と水晶体を分つ	大小腸の区別なく、盲腸も描かず	上記の影響なし
安永2 —	73	麻田剛立 (春まで3回)		獣類を解剖、観察は極めて正確		独創的
5 3.—	76	山脇東門 「男子内景真図」	京都			玉砕臓図より進歩
天明3 中秋	83	小石元俊ら 「平次郎解剖図」	伏見		輸尿管が問題とされていない	解体新書影響稀薄
寛政10 2.13	98	三雲環善ら 小石元俊ら 「施薬院解男体臓図」	京都	髓骨と砧骨とを写生。腎臓の表面に腎葉の境を表はす	会厭と声帯の作用混同。輸尿管を描き、腎血管の区分不十分	前回より格段の進歩
享和2 初冬	1802	中達・若村	京都	(三谷公器「解体発蒙」)	骨髄を脳、脊髄と一緒にとす	京の解剖の綜合

作り上げた研究的精神はすばらしいものであつた。そして、その成果をとり入れた元俊の寛政十年の解屍が前回と格段の進歩を示したことは、京都の蘭学のためには輝かしい業績であつた。以下、元俊が玄白に会し、さらに東遊して玄白に師事するまでの進歩のあとをたどつてみよう。

元俊については「先考大愚先生行状」^①が比較的まとまつたものである。まず注意したいのは永富独嘯庵に師事したことである。永富独嘯庵は長崎に遊び、吉雄耕牛から蘭方を学び、蘭医学の精なるに感じていた。元俊が彼に師事したのは二十歳頃であるが、蘭医学に対する関心はこの頃強くなつたとみてよいであらう。「行状」に、元俊が五要を主張した中に、「和蘭は医理に委しき国なれば、其論説療法を心を用ひて学得へし」とある。

つぎに注意を要するのは元俊の西遊である。元俊は宝暦十四年(この年明和改元)父を失い、母のすすめて西遊の旅に出た。「行状」に

先考漫遊の中凡一芸に名あるものは尽く心を委ねて其術を問ひ、六年にして大阪に帰らる、得る所の奇方良術は云ふも更なり、心に看開きし事多き故に、未だ若年な

れとも療術の効験人を驚かす事多く云々と述べられてある。これが一片の修辭でないことは、小石家に残る元俊自筆の「西遊再功」の驚くべき克明なる記載が証明する。いまその二番目の治方の例をとろう。これは安芸の井上宗伯の用いたものである。

此方其家ノ真方ナラズ
方ヲ惜ミテ此ノ偽方ヲ
伝フ後チ其真方ヲ伝フ
別に証ス

○傷寒時疫発汗極奇方伝同上(筆註)井上宗伯此方本芸州草津西道朴家方其実者西洋方 此方無名以用之

百草霜十匁 硫黄五匁
白桃華陰干十匁
右三味為細末糊丸●如
此大十粒以熱酒下是真
方也尚ヲ其書状ヲ附ス

三日復常其邦俗名曰三日丸
土龍 和名ウゴロモチ爪と口吻トヲ去ル
ハラワタハ不去黒燒
白桃華 五月ニトリ 此物発汗ヲ主トス
蔭干ス
萍蔴 花葉根共ニ用ユ
各等分

右三味為細末糊丸◎此ノ大サ以酒用

この本文の間に次の手紙が挿入してある。

別ニ申上候、私家方三日丸、平戸ニ而書付差上候、差出人目繁ク御座候而、一味相違仕御座候、極秘方之儀候無^レ拋奉^レ欺^レ先生一候段、御赦免可^レ被^レ下候、此度本方左ニ申上候間、御用ひ試^レ可^レ被^レ下候、実ニ妙方ニ御座候、

且又耳聾妙藥之儀私用ひ申候処、三人共全快仕り候、南
溟先生江茂申上候而、南溟先生御用ひ之病人一人茂全快
不_レ仕御座候、是を先御用ひ被_レ施宜敷候

病發熱惡寒麻黃湯葛根湯椿枝湯之症共三日丸主_レ之、
三日丸方

百草霜十匁 硫黄五匁 白桃葉陰干十匁 右三味為米糊丸●此六十粒
以熱酒下宜令 覆取汁而後二三日莫令中風若誤中風則藥無
効蓋病發三日之間宜用之之過三日則無効故号三日丸

是井下宗伯後ニ真方ヲ申シ来ル書状ナリ

ここで「行状」の誤と思われる点その他をつけ加える。元俊
は安永六年、三十五歳の時京都に出て皆川淇園門に入った。行
状_レではここで柴野栗山を知つたこと。安永二年に「解体約
図」翌年「解体新書」が刊行されたが、これを見て感服したこ
と。東遊の志はあつたが、妻子の累で急には果さず、江戸住の
栗山に托して書を玄白に寄せたことなどが出てゐる。(五〇六
頁)しかし事實はこうである。栗山は安永四年、京都より三度
目の江戸移住で、安永九年頃にまた京都へ歸つた。つぎは天明
八年正月幕府に召されて京都を發つてゐる。元俊の結婚は天明
三年、長男元瑞の誕生は翌年である。だから元俊は早くより栗
山を知り、「解体約図」などの出版後、栗山江戸滞在の中にこれ

に托して玄白と文通したか、あるいはこのことは元俊が東遊し
て歸洛後のことであつたのか判然としない。また元俊が「解体
約図」を見たのはいつか判らないが(小川鼎三博士は京都移住
の安永七年ごろと推定される、天明三年までは「妻子の累」が
なかつたので、東遊の志が急にとげられなかつた理由は妻子の
累ではない。もつとも文明六年、妻が歿してから東遊したの
で、天明三年以降に東遊の志が湧いたとすればそれでいいわけ
だが、時間的にやや間のびがしてゐる。

つぎに元俊の主著とみられる「元衍」について述べよ
う。これは天明八年の大火で焼失したのでその内容は知り
うべくもないが、「行状」によればかなり理論的な内容を
もつてゐるようである。天明六年の東遊の時首にかけて
行つたというから、この時までに出てゐたのであ
り、大槻玄沢にも見せてゐる。亀井南溟の手紙に

先頃小林被_レ參、後又淡輪生相見、追々御近状承申候
而、御床敷存候、不佞近状も御聞可_レ被_レ成候、別後十年、
何さへ相替候義出来不_レ申候、足下医術御銀鍊之御様子、
大著述思被_レ立之由、何卒御成就可_レ被_レ成候、(中略) ……
…三才之御工夫、余程熟し候由、淡輪生嚙候、御伝授申

度候

と述べている。この手紙の小田・淡輪は、小田享斎（永富門の俊傑——「行状」四頁参照）と淡輪元潜である。同輩間において、元俊の著作の進行が知られていたことを示している。

なおこの書翰は天明五、六年のものと推定。文中「三浦安貞とて、豊後之老人御座候、もはや七十余に候」とある。梅園は寛政元年六十七歳にて歿。「七十余」云々を梅園の晩年をさすとすれば、天明末で、元俊が「元衍」を再著述したことか、ただし「足下家累にては御遊行出来申間敷」とあり、東遊前と思われる。

のちに元瑞が断片を集めたものに玄沢が序をよせている。文政五年のことである。この序文は二つある。それによれば

繩床を設けて坐すること数年焦思刻慮始めて天地人身の理を警悟する所あり、遂に元衍六十巻を著し以て医事を統括して欠遺あることなし。始めて万変の疾を待つに足るとなしぬ

と言ひ、その所感として、

一日元衍に言及す。乃ち出して示さる。余取りて之を讀むに、其論宏濶奥遠、其の論測るなし、而して其の帰するところ喁蘭と符合する者多し。余嘆賞して曰く君蘭学未闡の時に先んじて其の見る所此の如し、所謂文王なくして興る者とはそれ君の謂かと。（ともに原漢文）とまで激賞している。

元俊が京都へ出てから東遊するまでの間の出来ごとを目すべきものが二つある。その一は天明三年、橘南谿（當時卅一歳）らと伏見で解屍し、翌年「平次郎解剖図」を刊行したことである。これについては前掲「明治前日本医学史」にも述べられているので詳細は略するが、元俊が刑屍の胃の小なるを獄吏に質してその理由を確めた話があり、かなりの観察眼を認めうる。京都では元俊は解剖において有能練達の士と認められていた。柚木太淳は「解体瑣言」で「小石有素遊歴四方而為解臍凡十余次其技固無匹敵焉」と述べている。

第二は天明五年に玄白に会つたことである。かねて尊敬する新学の基礎開拓者に対して、たとえそれが侯爵陪従の

帰路の三五日の滞京であつたとはいえ、元俊がいかに熱心に憂積した疑問を質したかは、諸書の記載によつて知ることが出来る。この会見によつて元俊はいよいよ東遊の必要を感じたであらう。さらに一ヶ月後、玄沢が長崎遊学の途次、元俊を訪ね、東帰の際もまた立寄つてゐる。

かくて天明六年九月、妻の死後元瑞を外家に托し、門人真狩元策を伴つて待望の東遊の途に出た。江戸における元俊の勉強についても、諸書の記するところによれば、極めて真剣なものであつた。この年、江戸の蘭学はようやく草創期を過ぎて發展期に入らうとする時期である。玄沢が芝蘭堂を創設したのがこの時期で、草創の先学多く在世の時代である。その裨益するところまた多大であつたと思われる。ただ江戸滞在半年間の元俊の行状を知る直接資料の乏しいのは遺憾である。ここには筆者の知る唯一のものを掲げておく。すべて天明七年のものである。

正月十二日(虫) 吉原病用、元俊来宿

三月 八日 雨・直 昼後晴、元俊来宿

三月十五日 雨 昼元俊来、清女来、伯元暇乞のため也

三月十六日 雨(中略)今朝伯元、元俊西上

ついでに、三月廿三日に伯元(玄白養子)が小田原より出した書翰を、同じく四月五日には島田より出したものを入手、七月廿四日「小石元俊宅大阪道修町(筆註)道種町、薬屋の街)御霊前筋口入北側」、翌年二月廿三日「伯元着」を書きとどめてゐる。天明六年の分がないのは残念であるが、七年に入つては帰洛まで約七十五日の間、元俊が玄白を尋ねたのは二回であるから、「蘭学事始」の「日夜来て間難したり」とあるのは天明六年を主としてであらう。

元俊が西帰して後、玄白が出した書翰が一通小石家に残つてゐる。(一号書翰)この書翰の中で、元俊ら一行が帰途川支え(大井川か)になつたこと、伯元が柴野栗山門に入つたこと、「御立寄入ニ御覧ニ候叔父(従弟吉村辰碩か)に被レ頼候書も大方卒業仕候間、近日より愈々本道(内科のこと)書に手を懸可レ申奉レ存候、左候はば面白き事も出可レ申候、見当り次第、追々可ニ申上」こと、東遊の際元俊が玄白に「御咄被レ成候癩之方は如何御手に入申候哉、左候へ、何卒御伝授被レ下度奉ニ祈上」ことが述べられてゐる。江戸、京都の蘭学の交渉の一端を物語つて興味がある。(本書翰は五月五日付、元俊の帰郷は四月六日、なお

この書翰の前に玄白はもう一通だしている。現存していません。

① 新村出「京都近代学術史論」(新村出選集第三卷所収)

② 新村出「平沢元愷の長崎松前漫遊」(選集第三卷所収)。福知山中学「朽木昌綱公」など。地誌の方面はすでに中村惕齋に先蹤を有し、松田玄々堂まで系統を引くが、その発達は顕著ではない。

③ 主として「明治前日本医学史」巻一・二によつた。解剖事例は本稿に必要なものに限定した。事例は巻一に年代順に詳記されている。ただし寛政五年、水戸の前島松亭のが欠けている点は、中野操医博が書評で指摘された。(「医譚」復刊第八号)なお京都において、享保十七年一七根来東叔が土中の骨を研究材料とした「人身連骨真形図」がある。(前掲書にもあり)

④ 長男元瑞著。「文化史学」第九・十号に羽倉敬尚氏の解説を附し連載。以前にタイプで数部頒布された。しかし校正はやや正確を欠く。今回は羽倉氏の素志をまげて頂いて、筆者および後裔小石秀夫氏の希望通り、筆者が校正にあたり、一切原文通りとした。ただし第二回分は十分校正の余裕がなかつたことを附記する。なお元俊についてはその後の研究も含めて、伝記の研究を発表する予定である。

⑤ 独嘯庵については富士川游著「訳解漫遊雜記」がまとまっている。本書には「獲語」も附載されている。他に浅田惟常「杏林雜話」今村了菴「杏林余興」がある。雜記原本は京大富士川文庫にある。宝曆十三年(この年山脇東洋幕府に召され、東上に

際して赤馬閃の独嘯を徴した。独嘯東上に際し、広島に来暮時東洋の計に接し、京都で後事を謀り、大阪に移住開業)夏成り、明和元年九月刊。なお「獲語」中の次の語は元俊の武士的風格と考え合せて興味がある。「将法第四、天下雖安、忘武則危、士君子之職、常須講明其道、作将法」

⑥ 独嘯庵の蘭医学については次の資料をあげておく。「和蘭之医、善汗吐下、宝曆壬午春余西遊到長崎、就訳師吉雄氏、得聞彼医方」。(漫遊雜記)なお汗吐下は治療の三方で、発汗・嘔吐・下痢による解毒法である。「余緝而閱之……噫仲景歿後二千年、得其道於紅毛、可以補古方之欠者、蓋合田氏精誠之所致也」(合田求吾著「紅毛医言」への序)合田は讃岐医人、蘭学修業のため長崎に赴く途中永富を尋ね、永富にも長崎行をすすめた。なお元俊が独嘯に師事した年は「行状」の註に「十七歳頃」とあるが、独嘯大阪開業の年が元俊二十歳、また独嘯から元俊の名をもらつたのが二十二歳の時だから、この間の出来ごとである。

⑦ 「盤水漫草」(「盤水存響」坤)、六四頁

⑧ 藤浪剛一博士「橋南溪先生」(中外医事新報一二六〇号)平出鑑「橋南溪について」(史学雜誌六の一、二、七の五。)

⑨ 中野操博士も「医譚」の復刊第七号「素欬の交遊」(二四一五頁)でふれておられる。なお解剖図の「平次郎」というのは、小石秀夫氏は人名でなく、ただの男という程の意味であると教示された。

⑩ 「蘭学事始」、「行状」、「盤水存響」の前掲元符の序(洋学年表

にも引用) 参照

⑪ 玄白の入落は天明五年九月一日、玄沢の遊学は十月である。

「洋学年表」には蒞葭堂の日記を引いているので、玄沢が大坂で彼に会った概要は判るが、元俊を訪ねた状況は明らかでない。帰途も同様である。滝浦氏(後述)は帰途玄沢が元俊と東遊のことについて打合はせたとされる。天明五年は玄沢廿九歳、元俊より十四歳の年少である。この遊学が朽木昌綱の援助によること周知の事実である。昌綱は天明期には旺盛な著作活動の時期(元年「新撰錢譜」、四年「増補改正孔方圖鑑」、五年「増補改正珍貨孔方圖鑑」、七年「西洋錢譜」)であった。

⑫ 「行状」中に、江戸で会った人に中川淳庵の名が見えるが、淳庵はこの年の六月既に歿しているので、元瑞の誤りである。

⑬ 「杉田玄白金集」第一巻、鶴齋日録による。この日記は天明七年より始まっているので、前年のことはわからない。玄白の日記は概して简单で、前野良沢の死についても数字を記している程度である。なおこの全集は第一巻のみで中絶している。

⑭ 玄白と元俊との交渉については、滝浦文弥「杉田玄白と小石元俊」(医譚第十一号、昭和十六年十二月)がある。これは小石家に残る玄白の書簡十通を基礎としたもので、引用は抜粋である。全文を掲載しようとしたが、紙数の関係で省略した。他日全文を註釈つきで刊行を予定している。

前節においては、京都における学問の新傾向、すなわち伊藤仁齋に始まる古学の提唱と、後藤良山の唱道した古医方の延長の交点において、元俊の地位を規定した。一は東涯の経験的性格の發展としての青木昆陽を経て、江戸蘭学を考え、他は山脇東洋による解屍の偉業の効果を見たが、前者が後者に影響を与えて結実したのが元俊の蘭医学であった。本節では西帰以後の元俊と、その周辺をみることによつて、従来の学問とは異質のものの移植の成果をみることにする。

元俊西帰後、まず彼が当面する問題は古医方との関係である。元俊が山脇一門と討論し、ついに寛政十年の施薬院の解剖によつて蘭説の正しさを実証したことは、「行状」に述べられている。^①年代的にはやや不正確な点もあるが、京都における蘭医学に基く解剖が元俊に始まることは疑ない。ここで重要なことは、このようにして、元俊によつて京都の解剖学が劃期的に進歩したことである。^②この間元俊は寛政十一年と享和元年に東遊しており、また書翰による往復も屢々あつた。前掲「鶴齋日録」寛政十一年の条に

(九月)廿四日 同(註一疊)小石元俊若殿様御口診口口

とある。元俊はのちにもこの小浜藩の若殿を診断している。なお享和元年の日録には元俊の名は見当らない。

元俊は天明七年帰京後も時々大阪の道種町に寓居していた。(前述、勤齋日録、および「行状」七頁)天明八年一月の大火で一時大阪に移住したが、この年の十二月十三日付の大槻玄沢の書翰がこの頃の事情をよく伝えているので、全文を引用しよう。

爾後者御五ニ^ニ基^ニ瀾^ニ過候、時下寒威甚御座候処、愈御^カ安被^レ成^ニ御勤^ニ、奉^ニ恐^ニ賀^ニ候、御当地何之^ニ交^ニ候事も、無^レ之、拙家老少無異罷在申候、乍^ニ慮^ニ外^ニ御^ニ安意^ニ可^レ被^レ下候、先以春中へ御留守中 (七尾の岩城清五郎応診中、「行状」七頁)祝融氏之御大麥 (天明八年一月の大火)不^レ堪^ニ驚^ニ嗟^ニ之^ニ至^ニ候、年来之御撰述 (元衍)のことも空ク鳥有と相成候よし、扱々不^レ及^ニ是^ニ悲^ニ御^ニ義、此程實地 (大阪)へ御卜居之由、折角御再修 (元沂を)之御儀と存候、折から兼葭 (木村兼葭堂)より之文通にて、御動止承知仕候、此方社中何も不^ニ相^ニ替^ニ、拙^ニ義も不^ニ相^ニ捨^ニ置^ニ相^ニ動^ニ申候、しかし埒明不^レ申事之ミ御座候、乍^レ去^ニ少^ニしつ^ニつ出来^ニ寄^ニ候ものも御座候、解体新書重訂も余程出来申候、余程塩梅之ちかへ

候事にて候、甚た面白ク御座候、此間も刑屍觀^ニ蔵^ニ御座候而、又開ケ申候事も御座候、蘭学楷梯漸近出来申候間 (天明八年三月刊)此度入^ニ貴^ニ覽^ニ申候、先日蘭説夜話と申書二卷述作仕候、これは世俗ニ申候蘭説ヲ弁候書にて御座候、一時之作、君子より見候書にては無^ニ之、誠ニ世ノ眩惑ヲ弁申候迄之事にて御座候、此節割願ニ附し申候、正月申出板可^レ仕候、(これは天明八年十一月、有馬文仲が「蘭説弁惑」として発刊する旨の付言を書いている。「年表」も十一月に記している。同書の後書に、寛政十年附美久羅幽蘭齋は、さきに出版されず筆写で伝へられたという。天明九年正月の出版は中止されたとみるべきか、のち「盤水夜話」と称したと年表にあり)其節入^ニ御^ニ覽^ニ可^レ申候、栗山先生拔擢之^ニ拳 (天明八年一月仕官)結構之御義奉^レ存候、益々寵榮此上もな記事にて御座候、于^レ今阿藩 (讀藩の誤ならん)ニ僑居にて御座候、春ハ卜居之積御座候、小田生当年も祇役にて、毎度御出合申候、夏中拙稿の薦志 (出版時「薦録」)相話候処、此節校訂出来いたしくれられ申候、私私儀も去冬中、販国の上、愈家内引取候而、安居仕候、御存之通、材街 (材木町の意、「行状」六頁参照)狹隘に付、三拾間堀四丁

めと申所へ秋中転居仕候、是迄よりハ余程手広キ処ニ御座候、○兼葭ニハ毎々御出立ニ有^レ之候哉、此度同人より尋來候多羅葉、海椰子等之考いたし遣申候、御繕ひ被^レ成御覽可^レ被^レ成候、甚た面白^レしく御座候、○一角纂考阿れこれ見候方いまた余程申分御座候様申候、此間老翁も左様に申候、桂川序、拙跋文など之内、冗長転倒等も御座候様ニ申方御座候、其内跋文之内、木君喜迎ハ喜而迎^レ之乎、窮詰ハ窮極可^レ然乎之類、序文にてハ搜索不^レ遣ニ余力ニ云々搜索不^レ遣論弁無^レ漏と詰候が可^レ然哉、余力ヲ不^レ遣が専一不^レ申候よし、又跋文之内無^レ加上ニハ上ノ字ヲ去り、加フルコトナシの方か穩当かと申候、其余いろく御座候雖、一二概略申上候、猶又爰一応も二応も兼葭へ御相談へ、御斧正可^レ被^レ下候、菊池玄所へ去冬已來販郷いたし申候、是も少し君辺失意之事御座候、西遊甚た重々之由、追て申聞候、先日文通にて、奇病之間申聞候故、此間答いたし遣し申候、山脇君門生近來拙塾へ見得候者御座候処、写申候而京都へ為^レ登よし、御序ニ御讀ひ被^レ成、御覽可^レ被^レ成候、別紙認メ御尊許も承度候処、紛失不^レ能^レ其儀、如此申上候、爾來開ケ申候珍談奇話も不^レ少

候へ共、一々筆紙ニハ難ニ申尽、且歳晚俗務紛々、匆々如^レ此御座候、菊池之書御届申上候、真狩生（元俊東下時の隨行者、但馬の人、名元策、「行状」六頁参照）ハ如何、御同居ニ而御座候哉、扱々疎音仕候、宜御致意可^レ被^レ下候、申上度事如^レ漆なれとも、前文え□□（不明）○老兄御筆無性之事ハ承知ニ御座候へとも、ちとく御閑暇ニ貴書奉^レ希候、何事も来陽可^レ得^レ貴意候、恐惶頓首

大槻茂實 拜具

臘月十三日

小石老兄

座下

一年分の書翰ゆえすこぶる長文であるが、玄沢の行状が手にとるよううて興味ある。ここではその場所ではないので詳しくは省略する。文中、山脇門下の者が玄沢門に入つてゐるのは、東西の文化交流上興味が深い。元俊が江戸に出て蘭学の知識を身につけ、山脇門と論難した結果のことと見てよいであらう。

つぎは寛政六・七年ごろと推定される玄白の書翰（二号^③）

書翰)である。この書翰は元俊が大阪に住い、安岡玄真が玄白の二女と将来結婚して養子となる予定で、玄白に引取られていたころのもので、養子伯元と玄真の勉強ぶりを玄白は「甚出精、逐々和蘭医事相分申候、病因薬能等意外之事共多、于レ今始め事ながら毎度感心」と報らせ、元俊にも種々治療上の得効があつたらうとかねく噂しているが、千里相隔つては力及ばずと残念がり、「且又帝亜加御製可レ被レ成候由、夫ニ付月桂笑之事御尋被レ申候、是ハ仁斗相用、春年ニ至候て用申候得者宜御座候、猶又御尋之筋も御座候ハ、可レ被ニ仰下」と、友誼を示している。追書には「悴并玄沢へ御加筆申達候、猶宜申上候」とある。

第三号書翰は年代不明で、玄白宅が近火に類焼した時の見舞に対する礼状で、雑具は皆焼失したが、「蘭書分ハ一冊も焼不レ申、是ハ天命」と、不幸中の幸を喜こんでいる。

第四号書翰は元俊第二回東下直前、すなわち寛政十一年二月十八日のもので、一月十日出の元俊の書状に対する返信である。最初に星野良悦の木骨^④のことをのべ、ついで江戸蘭学界の模様を「良沢私杯風と蘭学を初て唱候処、最早

式拾七八年も相成候、存の外其道開け申候て、当時は海内半にも及候程の義に相成、色々訳書も出来申候、老兄先年御下向の時節(天明六年)よりは東都杯は格別の事に相成申候、豚児(伯元)玄沢之輩皆出精仕、内外之医書本草類迄余程出来申候」と回顧している。斯学の進展に無限の感慨にふける老先覚の姿が髣髴としてゐる。追書には「ハイルヘン御翻訳御座候由御頼奉存候」として、元俊が橋本宗吉に「パールヘイン解剖書中の子宮陰部篇を訳させていることを嘉し、辻蘭室や大町淳伯らが蘭学出精、玄沢らと文通していること(後述)、ロシアとの関係が漸くさかんとなつて、蘭学者がおい／＼用いられてきたこと、元俊から頼まれた元俊の父の事蹟調査(父林野李伯はもと小浜藩、玄白も小浜藩ゆえ、これに依頼)の状況などをのべている。

この寛政十一年は元俊が再び東下した時機で、子元瑞を玄沢に入門させた。実に十数年ぶりのことで、東都蘭学界の先達、中堅と旧交を温め得た。玄白は元俊に小浜侯の若殿の診察を依頼した。この間の玄白の書翰が四通(九月十五、十七、二十二、二十三日、第五ノ八号書翰)ある。事務打合せが大部分で、石川玄常も共に診察している。診察

は十九、二十四の両日で、結果は成功であつた。鶴斎日録には「十九日、若殿様(虫)」「廿四日小石元俊若殿様御口診□□」とある。元俊は得意の灸をやつた。(元俊の灸については「行状」の遺事参照) この後間もなく元俊は帰郷した。玄白はその後を追う如く書翰を出している。(第九号書翰) 玄白は元俊との久々の再会を喜び、「御頼之カテーテ^ル早速申付候処、細工人手間取、漸此節致^ニ出来^ニ候間、早々差上申候、御落手可^レ被^レ下候」といい、ついで「御伝授之薬は逐々致^ニ製法^ニ相用申候処」火加減を誤つたので、近日再び試みるといつている。東西の文化交流と、先覚の不断的の研究心とを知る上に興味あるものである。

つぎに宇田川玄真の書翰をかかげよう。筆者は後述の理由により、寛政十二年のものとして推定する。

先日貴箱相達、忝伏誦、如^レ敬^(曲)、新年之御慶御同意奉^レ祝候、爾来無礼候、愈御康寧被^レ成^ニ御起居^ニ奉^ニ仰祝^ニ候、小子先無^レ麥消光仕候、御安慮可^レ被^レ下候、誠^ニ去歳は度々得^ニ拜晤^ニ、幾多之新論奇説拜聴、鄙懐一洗憾悟不^レ少、辱奉^レ存候、御帰宅後早速御手簡被^レ下候処、日々紛穴不^レ酬^ニ貴章^ニ、多罪御海容奉^レ希候、此度柔克復帰郷候

付、縷々申含置候間、委曲御聞可^レ被^レ下候、尚亦内科選要之義、御世話被^レ下候之旨、忝存候、此度先草稿三冊上申候間、御熟覽御校正之上御出板可^レ被^レ下候、先人(槐園、寛政十年十二月八日歿)之時より三冊つゝ、出板仕候間、先三冊御刊行奉^レ希候、尚亦追々写し出来次第差上可^レ申候、尤二冊は板下之積リニ御座候、乍^レ去是も再三御校覽可^レ被^レ下候、一冊ハ唯今出来不^レ仕候故、先其儘上申候、御地ニ而板下被^ニ仰付^ニ可^レ被^レ下候、段々跡六冊も出板可^レ被^レ下と存候間、早々出来仕候様奉^レ希候

○去歳も一寸御咄申候鄙稿内景図説、去年より段々草稿出来仕候、是も何^レ大庇ヲ以刊行仕度と存候、大抵二十巻ほどに相成可^レ申候、此書は誠ニ内景之大成に御座候而、数部之解剖書ヲ訳定仕、至而精密ニ御座候、是ハ別而御斧正相願度存候間、出来次第入^ニ御覽^ニ可^レ申候、此義ニ付何卒御面晤仕度、縷々御相談申度と存候得共、扱々官途難^レ遁、御地へ罷出候義も難^ニ相成^ニ甚遺憾^ニ存候、因^レ茲何分又々当地へ御下向被^レ成候義ハ難^ニ相成^ニ候哉、御熟考被^レ下、今一度御来過奉^レ希候、若難^ニ相成^ニ義ニ御座候ハ、何分小子罷出度と存候間、其御手段も御座候ハ

、御工夫奉^レ希候、○扱先達而も御診療被^レ下候小子
 義も兎角病身ニ而、迎も長寿無^ニ覺束^ニ存候間、何分多年
 訳定仕候程は早々上木仕度と存候、何分御扶助奉^レ希候、
 尚亦先達而御弟子中御修行ニ御越被^レ成候、一兩年之内
 ニハ被^レ仰候へ、承知仕候、其内にも漢学有^レ之之人物、
 御扱茂被^レ下度、小子相談にも相成可^レ申、此段奉^レ希候、
 尚亦從^レ是度々御尋問可^ニ申上^ニ候間、書通便利之所ハ当
 地何方へ出し申候而宜候哉、委細被^レ仰聞^{可^レ被^レ下候、}
 縷々申上度候得共、筆紙不^レ尽候、委曲ハ柔克へ御聞可^レ
 被^レ下候、此方家内皆々宜申上候様申付候 不備

三月十二日

宇田川玄真

小石元俊様

几下

この書翰は従来不明とされた点を解明する重要なもの
 である。玄真が宇田川家を継いだのが寛政九年末、元俊の東
 遊が寛政十一年と享和元年の二回であり、「去歳」とある
 からその何れかの翌年のものである。「柔克販郷」が判明
 すれば決定しうるが、他日を期することとしたい。この書

簡で重要なのは、内科選要と遠西医範である。前者は槐園
 が寛政五年に一度出版し、その後増訂版の筆を進めつつあ
 った際に歿した。ここにいう内科撰要は、その増補版(重
 訂内科選要)の方であろうか。「年表」では本書は文政五年
 刊。次に「内景図説」の方であるが、これは遠西医範と
 名づけられ、三十巻あつた。出版についてはわからない。
 これを要約した「医範提綱」は文化二年に刊行され、普及
 した。(明治前日本医学史第二巻、一六七—一七〇頁をも参照)
 この書翰は玄真の抱負と、元俊の援助のさまがまざくと
 見られる点で興味があり、東西蘭学の交流を如実に示して
 いる。

つぎに大槻玄沢の享和元年のものを掲げる。

爾来御無音打過申候、時下秋涼相催候、御全家様御清福
 被^レ成御興居奉^ニ遙賀^ニ候、隨而拙家老少無^レ恙罷在候、乍^ニ
 慮外ニ御放慮可^レ被^レ下候、先達而御門生方西帰之後、御
 念書辱読、両生よりも謝語御叮嚀之義、皆様へ御返書も
 不^レ仕失礼罷過申候、先醒ニも貴恙御全快之状奉^ニ大賀^ニ
 候、永富氏之義は遂々御聞及之通、終ニ泉路に被^レ赴候
 御義、御同齊遺恨不^レ少奉^ニ存候、扱は同姓大槻民治と申

者、年来聖堂御学館ニ留塾罷在候、此度暫時之御暇に而西遊仕候、少間は京撰の間にも滞留、諸名家へ謁見相願申候、御尋も可ニ申上二候、淇園先生始、御知音之御方々へ御引合被下度候、乍レ序勝地名区も一見為仕度、此等も宜キ御手筋之儀、是又御世話之義何分奉、託候、御地之事へ雅俗共ニ同人口頭に御聞可被下候、先生之御謝答且此段御頼仕度、如レ此御座候 恐惶頓首

大槻玄沢

八月廿九日

小石元俊様

坐下

猶々先月中伯元事陪駕にて若州罷下り、出都も仕候趣御座候、定而御尋申上、御出会被レ為候半と奉レ存候、今度者指急キ用事計り、草々頓首

右書翰中、永富は龜山で独嘯庵の子。享和元年六月十五日四十五歳を以て歿。また伯元のことについては、この年九月一日の玄白の日記に「伯元蒲原状来る」とある。この書翰は平泉大槻民治の西遊に際し、元俊に種々依頼したものである。

小石家に残る玄白の最後の書翰（十号書翰）は文化三年三月廿日のものである。この書翰は、石川玄常門人吉田玄庵上京に際しての紹介文である。この書翰中に「近年格別及ニ衰老」と寄る年波をかこつている。ついでながら文末に「江戸も近来珍敷火災にて世上も騒々敷、拙茶杯幸に遁候得共、同様之事繫ニ心中ニ不レ静」とのべているのは、翌文化四年の「野叟独語」の記述との共通性が考えられて興味深い。追書中「増々御大名承及申候事に御座候」と、関西における元俊の地位の一端を裏書きしている。

なお玄白はこの前年の文化二年、蘭方医として初の將軍賜謁の名譽を得、文化十四年、八十五歳をもつてその輝かしい生涯を閉じた。

元俊については、なお寛政二年、間重富とともに傘匠橋本宗吉を玄沢門下に入らしめたこと、享和元年に究理堂なる家塾を建てたことなどがあるが、ともに周知の事実であるから詳しくは述べない。

ここに元俊の叙述を終るに際し、最後に元俊の医者としての態度や蘭学についての考をつけ加えよう。その勉学の

態度は、既往の叙述から当然の帰結として出てくることであるが、「行状」（廿二頁）はこのことをよく要約している。

すなわち「医术は勉めて実験を事とし、古医道の中より超脱して方は古今を問わず、形似を捨て機変活用を主とし、成規家伝を固守するの輩を非難し、弟子にも「吾活法を死法となす事勿れ」と戒めた。この点は元俊の進歩性を示すものであるが、しかしその反面において、国禁の横文字もオランダ語に限つて邪宗でないから許されたのであるから、医書以外の蘭書は目にも触れてはならぬ。医学以外の蘭画・器械は取扱つてはならぬ。天文等のこのことは官命を受けた人について聞くべし、もしこの禁を破つて咎を受け、蘭医学にまで悪影響を及ぼしてはならぬと、慎重な態度を持した。（なお拙稿「新宮涼庭の研究」をも参照、近刊）

橋本宗吉が玄沢の門に入つたのは、元俊・重富がともに蘭文を読めなかつたためであるが、この頃京都において、直接蘭文を読もうとしたのが辻蘭室^⑦である。辻蘭室は京医村田玄隆の子として宝暦六年十一月廿六日松阪に生れ、明和六年十一月、十四歳の時辻松亭（明和六年五月歿）の先養

子章業故あつて辞官ののち、松亭の子として辻家を継ぎ、翌年久我家に仕えて従六位上、安永六年信濃介、天明三年信濃守に進み、すこぶる久我信通の信任を得た。

蘭室が蘭学に志したことについて、「先子行状」は次のごとく伝えている。「公辞職後君亦閑多し。又公薨後君今公之譏に値い、屏去六七年、此を以て阿蘭学を修む。是時世尚蘭学者希なり。江戸に杉田玄白、大槻玄沢の二人ありて、京摂一も聞ゆる者なし。君初め阿蘭訳人堀門十郎、職を辞して江戸薩摩邸に赴く次、京寓月余なる者に就き読法を学ぶ。後自ら稽へ、独り研して遂に之を成すを得、蘭語^⑧八袋五十巻を著す」とある。久我公が内府を辞して散位となるのが寛政四年正月六日、その歿年は同七年九月十三日である。（「公卿補任」による）蘭室は寛政四年以前すでに「蘭学楷梯」によつて独学しており（「洋学年表」による）したがつて蘭学には早くより関心を持つていたとみられる。その原因については明言し難いが、彼の生家が医家で、祖父は法橋、父も京都でかなり繁昌したこと、彼が読書を好み、はじめ宋学、のち堀河学派の伊藤東所の門をたいたこと、「私の禱を好まず、卜占を祝するの類皆絶へて為さ

ず」という性格、久我公の好み（後述玄沢の書翰）などから考え併せられるであろう。

堀が島津榮翁の「成形図説」編集に聘せられたのは寛政四年のことであるが、ついで蘭室は京医村田元碩を通じて、大槻玄沢にも教えを受けていた。このことは「盤水存響」に収められている村田宛玄沢の書翰に明らかである。

（日付は癸丑九月朔、寛政五年である。時に玄沢三十九歳、蘭室は一ツ年下である。）それによれば「京都にて御同社中御会読」（この同社または社中という言葉は蘭学者の書翰によく出てくる。蘭学界の志向をよく示している）もあつたこと、玄沢は「御噂のみにて辻君には未だ御相識にも不三相成」が、辻が「故内府公御好被遊候御志」をつぎ、「同好御執心之御事毎事感服」し、「乍三未熟御添削は可三申上」と親切さを示している。

「蘭語八箋」を著わした後の蘭室について、「先子行状」を引用しておこう。

（前略）蘭語八箋五十巻を著わす。従学者日に多し、江戸諸州の名流、古を好み雅を尚ぶの人之京を過ぐる者訪臨せざるは莫し。君の晩年、京師の蘭医漸く多く、衆君

を推して京撰蘭学の巨魁と為す。其苦学、齡八十に及んで猶蚊脚字数十巻を写す。

君医薬の理に通じ、又丹藥鎮製を好み、特に其至術を得。薄荷精蓄微露固の如きは坊製に勝る。甘汞丹、革魯鳥迷と号するものに至つては、則ち特に其精妙を窺め、諸邦の製も及ばず、遂に阿蘭製よりも勝るに至り、人争つて之を求む。其初め失誤する者十余次、又益々考按して遂に至法をなす。凡そ一煉三晝夜を須ひ、七煉にして始めて成る。老後も連夜寐ねずして疲れずと。（以上「先子行状」はすべて漢文）

文化十年には「陸海戦図解」を著わしている。（筆者未見）「洋学年表」同年の条に、本書は銅版図で、ラテン文の大意を義訳したものとあり、編者は蘭室がロシア文にも手を染めたとされている。本書が時勢に触発されて著わされたことはいまでもなからう。海戦といい、ロシア語といい、蘭室の研究の発展を明示したものである。

最後に蘭室の研究グループや交友の蘭学者者について、資料の示す範囲で述べておこう。蘭室が元俊とともに関西蘭学の巨擘として（海上随鷗もそうであるが、期間が短い）

協力しつつ活動したことは容易に首肯しうるところである。そして、蘭室は元俊の子元瑞とも引続き交わつていた。小石家々蔵書翰に蘭室のものが一通ある。内容は「先達相願候者より又々申越」したによつて、面倒ながら「ゴムカテイテル一具何卒御取寄被下度」というものである。また前掲の玄沢の書翰にあつた大町（淳伯^⑤）は、蘭室とかなり密接な關係にあつたようである。そして、二人の江戸との交渉も永く続いた。玄白が元俊にあつた書翰（寛政十一年三月廿八日付）の追書に、「其地とても辻信濃守初、大町氏杯も蘭学出精の由、又玄沢より申越候て、此輩も毎度文通」していたことを明らかにしている。さればこそ、寛政十年の芝蘭堂の新元会（いわゆるオランダ正月）の席上に作つた医者番付にも、蘭室が東の前頭九枚目、大町が西の十九枚目に、ただ二人の京都人として並んでいるのである。

蘭室の屏居は享和年中に許され、のちには出羽守を称した。「京羽二重」文化版、「平安人物志」文政版にもそれぞれ名前がみえる。天保六年十二月十三日、八十一歳を以て永眠した。時に従三位、墓は大徳寺碧玉庵。

〔附〕元俊に関する資料で、甲子夜話続篇に松浦静山が寛政十二年冬の紀行の十二月九日の条に次のごとく書いてゐる。

九日従行の者行李の為にけふも邸に留る京の医師小石元春は先生（註―皆川淇園）の子が同門にして医も達人なれば亦来れりと聞てきのふ迎へたれど来らてけふ朝早く来れば病養ふことなど委しく聞て又世の雑話に時を移す元春来る時予に贈るものに細川三斎公和歌二首（「行状」にも収録されているので略する）

春いふまことに此和歌を誦して忘るゝことなくば道に
ちかゝらむと医師の言葉なり
と。なお夜には淇園・木村兼葭堂が訪ねている。

つぎに元俊の弟子については、玄沢が元沔序文中に次の人名をあげている。

生徒又競叢其門如梁田養元飯田玄仲南部伯民橋寿庵斎藤
方策横川仲藏諸子皆出於門下

右のうち斎藤方策が最も名があり、大阪に開業して橋本ともよく、のち玄沢にも入門している。寛政元年元俊に入

門、同八年元俊の大阪の治療を委任された。つぎは方策と同郷の周防の南部伯民が有名である。

①「行状」六頁終より三行目「其頃は山脇東門。先生の名海内に轟き」とあるのは、原本に東洋とあつたのを筆者が訂正したのであるが、これが更に間違いで、東海とすべきであつた。歿年は東洋が宝暦十二年六二、東門が天明二年八二である。この点、大槻如電博士も同様の誤を犯しておられる。すなわち、「日本洋学史料」に「是ヨリ先宝暦四年東洋嘗テ罪囚解職ノ挙アリデ職志ヲ作り大ニ古説ノ誤謬ヲ正シシガ元俊ノ説ク所更ニ其異ナルヲ見テ門弟數十人ヲシテ互ニ新古ノ両説ヲ討論セシム、元俊弁析最確ナリ、明年遂ニ官ニ乞ヒ罪囚ヲ解剖セシニ臍腑ノ位置形状ヨリ骨部細微ノ処ニ至ルマテ和蘭説ト少シモ違フ事ナケレバ、東洋及諸弟子共ニ其真理ニ服セリ」とある。なおこの明年にしても、又「行状」の解剖にしても何時のことであるか判らぬが、寛政十年とすればやゝ年月がとびすぎる。「行状」の註参照）
袖木太淳の言うごとく（前掲）元俊が屢々解剖していたとすれば、さらに以前のことであろう。

②前掲「明治前日本医学史」巻一で小川鼎三博士は、山脇家を中心とする初期の解剖が「ただ内景を見たというに止まり、五臟六腑説が西洋解剖学に劣ることを確めたに過ぎ」ず、元俊が蘭学を京都に導入して「初めて精密度を増し」（一一三頁）また「解体新書」ないし蘭学の影響を濃厚にもつ「施薬院解身体臟図」は、視察の深さも平次郎の場合とは「格段の差」があり、

元俊十数年間の進歩を示す（一七四頁）とされている。

③滝浦氏の推定による。元俊は天明八年の大火で大阪移住、寛政八年、病家を門人齋藤方策に托して著述のため京都移住、この間全期間大阪に居住したのかどうか目下のところ詳にしない。

④星野良悦の木骨については、玄沢は「重訂解体新書」に、新宮涼庭は「西遊日記」に書いている。なお玄沢は秋の事としている。玄白の日録では十一月廿五日に「星野良悦詮議持参」とみえる。ついでながら富士川博士は「日本医学史」に、戊午としながら（寛政五年）とし、巻末年表にも五年に入れられている。誤である。

⑤このことは緒方富雄著「蘭学のころ」の「洪庵の恩師中天游先生」に詳しい。（同書四五四～六頁）ただし小石元俊の序文とあるは元瑞の誤。

⑥カテーテルについては富士川博士「日本医学史」五八七頁参照。なお中野操博士の論文あり。

⑦辻蘭室については、従来ほとんどまわつた記事がない。筆者は幸に京大図書館蔵の「蘭室伝記資料」（近江堅田の辻家に残る「先子行状」と「日記要略」とを合してかく称した写本）によつて、蘭室の行状をある程度知り得た。「先子行状」は四百字詰原稿用紙にして約七枚、「日記要略」は同じく四十五枚程度で、後者は遺憾ながら天明六年までで終つている。

蘭室諱は章従、字克成、幼称幾弥、号蘭室、又孜軒、祖父村田玄隆は夔州多気郡山田洞官、京医師法稿。父も同名玄隆、母は夔州相可郡中村氏女雪で、松阪で生れている。兄に隆碩、

玄超の二人がある。養家辻家も堅田郡の祠官の家柄、家祖辻松菴は医を業とし、清水寺西に広壯の家宅を有し、伊藤東涯らの名流と交わる。元禄十六年七月三日歿。子石菴は大津鍵屋町に住し、医を業とした。享保六年五月十九日歿、その子厚軒昌楯また半井氏に学んで医を業とし、法橋に叙し、また膳所侯に仕えた。堀元厚と親交があつた。享保十八年三月四日歿。子松亭、久我戒山に仕え、中原の姓を冒し、章典を名とした。禅を慈雲に学ぶ。あとは本文に記した通りである。

⑧本書は完成するには至らなかつた。原本は京大文学部図書館にあるが、序文も何もない。

⑨大町淳伯、中野操博士發表の医者番付〔医諱〕復刊第十号〕に出ている。ただし伝不詳。

三

前節においては元俊宛玄白・玄沢の書翰を中心に、元俊の發展と辻蘭室の蘭学草創について述べた。ともに江戸の蘭学の興隆に刺戟され、これと密に接触連繫を保ちつつ、京都の蘭学、蘭医学の基礎確立に努力したのであるが、本節ではこの兩人によつて播かれた種が徐々に実つて行き、やがて次の興隆期を準備する寛政・文化初頭の状況を述べる。この期の進展はまだ調期的なものではない。そしてこの兩人によつて、京都の蘭学がどの程度に促進されたかは、

資料の不足から、その後づけは困難である。むしろ封建社会の漸次的崩壊によつて文化交流がすすみ、江戸における蘭学の進展が大きな刺戟を与えたと見る方が至当なのではなからうか。

最初にこの様相を年代順に整理すると、寛政五年には生象の野呂天然が医学に志す。七年(辻「蘭語八箋」起稿の年)のち海上随鷗に從学した小森桃塙が大垣の江馬春齡に師事し、八年、やはりのち随鷗に從学して小森と双壁の藤林普山が出京して医を学んだ。眼科の柚木太淳は解剖して「眼科精義」を著わし、南蹊は「傷寒外伝」を著わした。この年荻野元凱は江戸に召されて方書を講じ、御医兼河内守となり、江戸では稲村三伯(のちの随鷗)が「波留麻和解」を著わす。九年は藤林が「波留麻和解」を購ひ、帰郷して翻譯に努めた。丹後では新宮涼庭が従兄有馬丹山に從学、また柚木は女屍を解剖し、広川龍淵は「長崎聞見録」を著わす。十年は元俊解剖、江戸では玄沢が「重訂解体新書」を著わす。十一年は元瑞が父とともに東遊、玄沢に入門。小森上京。柚木「解体瑣言」を著わす。十二年は吉雄元吉蓼義堂を開き、「蘭訳箋諦」を著わす。吉雄については「洋学

年表」の記事以外に新知見はない。しかし蘭学塾が出来たということを知りうるだけでも、その意義は大きい。享和元年は元俊が究理堂を起し、また東下した年。二年は三谷公器・浅井兩阜らが解剖、この結果が「解体發蒙」(文化十年刊)である。涼庭は丹山について江戸へ出た。三年は広川龍淵が「蘭療方」を著わす。文化元年は吉雄が「駄舌医言」を著わす。文化二年は海上随鷗が京都に移住し、ここに蘭学は大いに發展する。緒方洪庵の師中天游もこの時入門するが、これ以前から京都に住んでいた。

以上の概観の中から、広川釜州およびこれと交遊のあつた三谷公器について、従来の研究と重複せぬ範圍で述べてみたい。広川釜州は華頂宮の侍医で、名は解、号は瑤池斎、大内介を称した。その著「医流蘭療方」をまづ取りあげよう。皆川淇園の序によれば、「広川生は多少医を業とし、博く見聞を得るために長崎へ行き、紅毛内科書をえた。これは大半訳してあつたので、これを完訳した。紅毛の薬方とは言へ、他山の石となるべく、これを用うるは人にある」(概要)とあり、このことを凡例に「本書は長崎の医師岡部某の珍藏するランレーヘンサクク(註一原著者

はアンミデル)三巻で、自分が長崎に遊んだ時ある人が複写して送つてくれた。これは既訳文が国字で、未訳文が蛮字であつたのを、余暇に篇章を附し、蛮字を通事に質して訳し、帰洛後九年、煩迂な点と国情により異なる点を削り、二巻につづめ、さらに四方の君子に校正してもらい(註一吉雄永貴閣、栗崎徳甫校)完成した。」(概要)と述べている。さらに重要なのは自序である。

解嘗論曰。学ニ蘭療ニ者可レ謂ニ不レ解ニ事之人ニ也。不レ知ニ学者可レ謂ニ亦不レ解ニ事之人ニ也。何以論レ之。曰。蛮国受ニ天地之偏氣。語言情態衣服飲食。異ニ於吾東方及支那ニ者甚遠矣。而今捨ニ吾聖人法方。反欲ニ学ニ彼蛮人法方。豈可レ謂ニ解ニ事之人ニ乎哉。又論曰。当今昇平四方浴ニ文華。聖人諸方馴ニ入病。馴則有ニ病難レ除者。故取ニ蛮夷偏僻諸方。以劫ニ其痼疾。則応驗或不レ鮮矣。而徒泥ニ着於古轍ニ者。豈可レ謂ニ之解ニ事之人ニ乎哉。然則何以免ニ其有ニ不レ解ニ事之譏ニ也矣。若夫知ニ蛮方ニ則為レ受ニ偏氣ニ者。而非レ為レ受ニ正氣ニ者。然有レ時可レ劫レ受ニ於氣ニ者痼疾。而後学ニ之則応レ謂ニ有ニ達識之見。而表ニ出於不レ解ニ事之人之外也。

享和癸亥秋九月之望 平安 広川辯題

この跋は龍淵の立場をよく現わしている。まず蘭療を学ぶ者は事を解せざるの人といふ、吾聖人の方をすて、彼をとる人が則ちそれである。漢方医らしい言であるが、蘭医方の滲透は否定しうべくもない。それを、聖人の方が病に馴れて治し難いものがあるから蛮夷の方を用うるのである。いたずらに古轍に泥む者は事を解するの人とはいえないだろうというに至つては、むしろ滑稽な強弁である。われは、この言を、彼の主観を越えて現実の偉力を発起しつゝある蘭方の状態を示すものと解すべきこと、論をまたない。

彼のもう一つの著に「蘭療方薬解」(文化二年)がある。こゝで龍淵は「蘭療方」が孫呉の兵法であるとすれば、これはその手兵であると述べている程度であつて、前著に異なりすこぶる素直である。これには三谷公器の序がある。これも龍淵が真の学医であり、家や服装に迷ひ、俗世に媚び、患家を迷はずものでない。本書は援溺救陥の良薬であると著書を弁護している程度である。

「薬解」の十年後に出た「蘭例節用集」は、その書の性

質から、彼の蘭学に対する態度の推移を窺いうるものである。本書は「洋学年表」に「通行本節用集の言語を和蘭辞書に準拠し、毎語伊呂波順序に排列」とあり、また本書裏付に「和蘭陀の例に習ひ字をつらぬ……若述作の趣向を襲ひ擬造する有べ千里正窮すべきなり」とあるように、彼のその趣向をほこつていた。序文はさらにこのことを明らかにする。曰く

節用集者、宗仁に昉まる。爾来継作各手段を競う。然りと雖ども五十歩百歩之間耳。余嘗て西洋言語之書を閲するに、第一言第二言、各次ぐに音を以てす。語を得ると便捷、斯の法の如き者無し、余倣いて以て此書を著はさんと欲し……勉強數更裘葛」と。

以上の三書の推移を考えるならば、蘭学の進展と状態をみることは容易であらう。なお彼は銅版面にも興味を示している。^⑤

次に三谷公器のことにふれておこう。公器は前者と異り、漢蘭折衷派であるから、その態度は頑なではない。その著「解体発蒙」における和氣惟亭の序文(和氣は公器の友人で、享和の解屍には公器とともに觀臟した)によれば、公

器は小野蘭山の門に遊んだことのある本草家（蘭山の「本草綱目啓蒙」の後序をかいた）でもあり、単なる解体家ではないという。むしろ公器は解体をわずか見たのみにすぎぬ。本書の特色は、題言にも自ら記しているように、京都における三度の解屍（東洋、南蹊と元俊、環善と元俊）の綜合と、解体新書その他の知識とを綜合せんとしたものであり、しかもそれが決して成功しなかつた。^① 漢蘭折衷派自体が、広義の蘭学に触発されて生れたものであり、公器もよく新説をとり入れ、過去の先学の親視実験の成果をも無視しなかつた点は、大いに勉めたりとみななければならぬが、その企図がその時代として成功したものでないことは、やはり折衷派の不徹底さに帰せられねばならないであろう。

江戸中期より末期への推転期は、医学の分野においては、蘭学の興隆によつて在来の医学に大きな影響を与えた。このことは漢蘭折衷派について少しく調べれば、興味ある結果が導き出せるのであるが、富士川博士の医学史によつてもその輪郭が理解出来るので、詳しくは述べない。

ただ古医方の発展した京都の地において、蘭学が惨透する

場合に大した摩擦もなく、古医方家も比較的円滑に漢蘭折衷に移り得たことは、この分野が単に理論によつて斗争するものでなく、実物と実際のな治療効果によつて優劣の結論が明確になる性格のものであつたからと見てよいであろう。

（附）天文学の西村遠里、養子太沖も注目に値するが、「洋学年表」以上の知見がないので詳して述べない。^⑤

①富士川・医学史では享和三年の著とある。著述の年である。筆者のみた本は富士川文庫、山口徳蔵蔵本。淇園の序は享和四年春のもの。本文約一二〇枚、図十五、絵は山口素詢。扉絵上部に「LANRIOHOO」とあり、また「有自然者医則為之臣僕也」の字がある。

②本書も前著同様吉雄閣、栗崎校である。本文は薬名を「ヤンニョウ Opia」の如く示し、主として諸毒を解くなどと効用をのべている。本書には龍淵の著書が広告されている。嬰児論・麻診論・按腹伝・疔毒録丹録・銀酒論・石菖品彙・痘瘡論があり、長崎聞見録と前掲の二著以外は、文化三年六月には未刊である。

次に「蘭例節用集」（京大文学部図書館蔵本による。一名「蘭例語典」）の奥付では嬰児論、麻診論、蘭療方、同藥解、按腹伝、長崎聞見録、傷寒打碎弁、疔毒録丹録、銀酒論、痘診論、備急方、虫鑑、蘭例節用集の順となつており、七十一冊が次出となつている。随分広範圍にわたつて関心を示している。

③ 広川は銅版面についてかなりの知識と技術とを有していた。詳しくは西村貞「広川癖著蘭療藥解の銅版面について」(日本銅版面志三三五-四四頁)参照。

④ 富士川、医学史五三三-四頁参照、その解屍と「解体発露」については「明治前日本医学史」参照。本文の記載中、その評価については同書によつた。

⑤ 他に鮎沢新太郎「西村遠里の万国夢物語」(歴史、昭一七・六)および「銷国時代における海外知識」等参照。

むすび

本稿の概略は過日の読史会例会で発表したものである。

その際、小石元俊の思惟の革新性、ないし進歩性について質問を受けた。おそらく蘭学といへば、戦後とくに問題にされがちな、封建社会内における反(あるいは非)封建的な思想、または封建社会の崩壊に対応する上部構造としての思想の変化が興味の対象となるであろう。したがつてこの点は一層掘り下げるべきであつたかも知れないが、本稿においてもかゝる質問に充分の解答を与えうる内容はもはやなかつた。これは筆者の不明にもよるが、反面にはまだ個別研究が十分進まず、また草創期をとりあつた段階にすぎないので、全期を叙述し終つてから、全般的な史論

にとりかゝることゝしたい。このため、史料保存家の公開を切望する次第である。

終りに、貴重な家蔵書翰集を快くみせて頂いた小石秀夫氏、書翰読解に御教示を得た羽倉敬尚氏に深甚の謝意を表すると共に、「富士川文庫」によつて後進にのこされた故富士川博士の無限の学恩を感謝する次第である。

(一九五六・七・一七稿了)

新入会員(入会順)

大脇保彦

二宮正道

藤縄謙三

中村幹雄

住吉商業高校

永田英正

上原栄子

早稲田大学
歴史学研究会

水木直節

大阪市住吉区南加賀屋町五五九

東京都新宿区戸塚町一丁目

早稲田大学文連内

adays estimated highly in showing the view of the life and the world of the merchant classes toward the end of the Tokugawa era. The foundation for this Shingaku thought must be sought in Confucianism, Buddhism and Shintoism, all of which were prevalent among the merchant classes. Thus the author here examines the quotations in "Tohimondo" (都鄙問答) and divides quoted books into three groups. The first, 38 in all, belong to Chinese classics, the second, 31, to Buddhistic scriptures, and the third, 9, Japanese classics. The result is that a large number of quotations are from the books of Confucianism, especially those of Shushigaku (朱子學). But we should not make a hasty conclusion that Shingaku is originated from Shushigaku. It certainly absorbed the teachings of Confucianism, Buddhism and Shintoism, but is, in its final form, independent of any of these.

Rangaku*(蘭學) of Kyoto at its Earlier Stage

by

Shiro Yamamoto

Genshun Koishi (小石元俊) and Ranshitsu Tsuji (辻蘭室) are remarkable figures in the development of Rangaku(蘭學) in Kyoto. In this article discussions are made on the academic background for the appearance of Genshun(元俊), the setting of Genshun from the viewpoint of medicine, the intercourse between Rangaku of Kyoto and that of Tokyo, the speciality of Ranshitsu (蘭室), how these two scholars provided for the prosperity of the Kyoto Rangaku, and how Rangaku and Chinese studies were combined into the field of Kanran-setchuha (漢蘭折衷派).

* Literally Dutch studies, i. e. earlier general Western studies in Japan mainly researched through Dutch sources.